この秋に心霊の修養を思え
六十余歳にしてようやく心霊の修養を抱く

◉『家庭』（『女子大学講義』付録　第二巻第十一号　一九一〇年）より

私は学問はありませんが、なかなか理屈っぽい頭で、信心などはせず、どちらかと言えば自力を信じる方でした。

しかし、還暦を迎えた昨年頃から「どうも今までの修養ではもの足りない」「自分というものの中に、まだなにか出し足りない力がある」「今、努力してその力を引き出してはじめて、自分の中に潜んでいる限りなき力を見出すことができるだろう」「どうかその力を見出したい」という熱望が、強くわいて参りました。

そこで大阪の牧師・宮川経輝氏に会って、いろいろ教えを乞うたのですが、その中でおおいにわが意を得たりと喜ぶことがありました。

私の理解で話すと真鍮（しんちゅう）メッキになる恐れがありますが、ざっとお話しすると次のようなことです。

修養には、知致（ちち）と存養（そんよう）と省察（しょうさつ）の三つがある。知致と省察とは、字の表すごとく、哲学や倫理学、その他の科学によって知識を明らかにし、自分の人生を深く省みて修養することである。これは大方の人の取る道だと思う。しかし、もしここで存養ということを心がけない人がいるならば、決して力は出ない。存養は力であり、力は命である。その命を四つに分けると、肉体の生命、知的生命、道義生命、霊的生命になると言われました。

そこで私ははたと手を打って、「そこである、そこである。私にはその霊的生命が足りないのだ」と気づいたのです。

私はこのとき、この四つの生命についてつくづく考えてみました。

肉体的生命、これは自分にまずあると思う。かつて父が病床に就いていたとき、身のまわりの世話は看護婦や他の者をいやがって、浅、浅と私の名前を呼んで、私でなければさせませんでした。

昼と言わず、夜と言わず、眼が覚めて、私が枕元にいないと機嫌が悪い。そのため片時も傍(かたわ)らを去ることができず、ついに四十日間、帯も解かずに看護しました。

見舞いに来られたお医者様方も、これではかえって広岡さんが倒れてしまうと言って案じて下さいましたが、私がその後も少しも看病疲れも見せなかったので、みな驚いておりました。

その他、ご承知のとおり、私は普通ではない境遇を過ごし、男子がする鉱山事業や銀行事業に携(たずさ)わって、いざという場合には昼夜兼行で仕事をするようなこともありますが、よくこれに耐えていけるという経験をしています。

次に知的生命はどうかというと、私は学問もなく、知識も深くありませんが、

しかし知的生命も自分にないとは思いません。

自分の生家である三井家の関係はどうなっているか、広岡家の関係はどうということも、大阪の商業界は今どうかということも、常に頭に明らかに入っていて、ここを押せばこう響くということがわかります。

一例を挙げれば、広岡家の復興のため、明治十七年頃、九州で鉱山事業を営みました。そのときなどでも、人々がまだ石炭の値打ちを知らない時期でしたが、これからの日本には米よりも必要なものは石炭であると思ってその採掘に着手し、門司(もじ)がまだ原野であった頃に率先して店を出して輸出をはじめました。

後に、事業を拡大するに当たって、個人の力でうまく支えることはできないと見てとり、これを政府に売りましたが、その後の状況を見ても機を誤ったとは思いません。

その他、ずいぶん事業上の難関を切り抜けてきましたが、その多忙な生活の傍ら、常に新しい知識を求めて、機会のあるごとに諸先生の講演を聞き、新刊

の書物を読みますが、やはり一方の経験と相まって、よくその知識を消化することができます。

では道義的生命はどうかというと、そういう綱渡りのような生涯を経てきたにもかかわらず、自分の心の中においては、潔く我が腕でやりあげたいという根本の目的をずっと失いませんでした。ですから、たとえ、人が賄賂で易々と切り抜けているのを見ても、「自分がしてはならぬことは絶対にすまい」という覚悟がありました。

こう考えますと、以上の三生命はとにかく自分に経験のあることだけに、よくわかりもし、その先伸ばしていくにもそれほど困難はないだろうという確信はあります。しかし最後の霊的生命については、どうしてもそれを味わうことができないのです。

実は、昨年一月、三十年来の胸部の持病を治療するために大学病院で手術を行ったことがありました。自分は万一を期して、心残りないまですべての処置

を受け、これでうれしく死ぬことができるというところまで準備して、いざ手術の際にはまったく生命を天に任せました。そのとき、麻酔剤をかいで次第に意識を失っていく心地は、まるで身体が空間と合致して、神と一体になったかのようで、どんなものがきても、自分を犯すことはできないと感じました。

その力は非常に大きなもので、真に命がけの力とはこのことなのだと思いました。しかしその後、「どうぞもう一度そのときの心に立ち返って、その非常なる力を得たい」と修養していますが、どうも得られない。霊的生命とは、必ずやその刹那の経験のようなものなのだろうと、心から慕い、求めているのです。

今夏、軽井沢に引きこもりましたのも、その生命を得るために修養したいという望みを持ってのことでした。ですから、ずいぶん読書もすれば、人にも教えを乞い、はじめから終わりまで徹底的に思索にふけってもみましたが、どうも集中しようとすると雑念がわいてきて、まったく純粋になって宇宙の霊に交

わることができません。

あるときは、山奥深く分け入って、人との交通もまったく断って思索にふけりましたが、それでも自分の心霊には何の響きもありません。自分の身体は痺れているのではないかしらと、ほんとうにもがき苦しみましたが、どうしても霊的生命の境地に達することができず、その困難さはとても人生を研究する比ではないということを悟りました。

ご承知のとおり、今年は軽井沢もちょうど八月中旬の連日の豪雨で、多くの川が溢れ、山は崩れ、家は流れて、町は一面の海のようになり、ようやく水が引いた後は、せっかくの町も二、三年は回復の見込みがないというまでに荒廃してしまいました。それを見て、もし山野の樹木が繁茂していれば、その水はこんこんとして流れ、多くの人々に恵みを与えるであろうに、山林を乱伐して、いわゆる存養のないときは、その力がかえって有害のものとなる……人間もやはり知識はいかに広くあろうとも、いかに才能はあろうとも、存養のないもの

は決して有益の働きはできないということを一層深く感じました。そういう意味では、私が心霊の修養がいかに困難であるかということだけでも知ったのは幸福です。

モーゼは四十歳から四十年間の苦難を嘗め、八十歳にしてようやく心霊の生命を得たと言います。

昔の聖賢方さえそのように苦しむのですから、どうして我々が一朝一夕に得られましょう。明日死ぬるとも、この難しいということを知ったのは、かえすがえすもまた幸福であると感じました。

今日、日本の国家にもう一つ力が出ないというのは、やはり私に今一つ力が足りないのと同じように、国民全体が無限の力の根本である霊的生命を得ていないからではないかと思うのです。

どうか謙遜に自分を知り、足りないところをなお求めていって、最後はその力の泉に達したいものであります。